
名誉の在処

sakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名誉の在処

【Nコード】

N4495R

【作者名】

sakura

【あらすじ】

任務のためソマリアを訪れた傭兵のジョスリンとアリッサ。与えられた任務はARSの高官の護衛。ICU過激派や、その他の武装集団との戦闘にジョスリンとアリッサは否応なしに巻き込まれていく。

「ジョス！」

名前を呼ばれて男は振り返った。

小さな子供が手を大きく振りながら歩み寄る。

迷彩柄のワンピースを着て、緑色のベレー帽をかぶっている。

大変、かわいらしい。

くると巻いたブロンドに白皙の肌。

水色の瞳はまるで宝石のようだ。

元々の巻き毛は、さらにカーラーを使って巻いたのか、丁寧な縦カールにされていた。

こんな埃っぽい街に着てまでおしゃれに気を遣ってるのか、と思ったが、それが少女の趣味ではないことは明らかでジョスリンはやれやれとため息をついた。

手首に巻いたミサンガはそもそも何の願掛けか。

「偵察行くなって聞いたからさ」

彼女はにつこりと笑いながらそう言った。

ローウエストのベルトに無造作に吊されたナイフに視線がいった。

「ガキが行ったら怪しまれるだろ。あからさますぎて」

「火の鳥は連れて行っても足手まといにはならないわよ」

クスクスと明るい声を上げる彼女に、ジョスリンは肩を落とした。「どうせ、ダメだって言っても聞かないんだろ」

バイクのエンジンを掛けた彼は両手を差しだした少女を抱き上げた。

ベレー帽をカバンにしまった彼女は、男の腰に腕を回して背中に頬をすり寄せる。

「しっかり捕まってるよ」

特に香水でも使っているわけではないのだろうが、ふわりと甘い香りがジョスリンの嗅覚に届いた。

「そついや、あんたの保護者は？」

大きな声で尋ねられて、彼女はジョスリンに捕まったままで顔を上げた。

「さあね、別にいつも一緒ってわけじゃないし。なんか用事でもあったんじゃないの？」

「ソマリアで？」

「わたしが知ったことじゃないわ」

しばらくバイクを走らせた彼は、木陰にバイクを止めるとエンジンを切った。

ソマリア。

一九九一年にソマリア民主共和国が崩壊して以来、無政府状態を経て暫定政府が設置されているものの、国内ではひどい混乱が続いている。

現在は暫定政権であるため、正式な国名を持たない。

「それで、結局、あんたの任務はなんなんだ？」

「ARSの護衛」

「……また面倒なことに首突っ込んでるんじゃないだろうな」

「いいじゃない、あんたを雇ってるのはこのわたし。なんか文句ある？」

バイクに寄りかかりながら煙草に火をつけたジョスリンに、少女はちよこんとバイクのシートに座って舗装もされていない道をたまに行き交うトラックを見つめていた。

「今度はなんなんだ？」

尋ねられて、アリッサは肩をすくめた。

「ARSさ、仲悪いでしょ？ ICUと。……で、そのICUの勢力がARSのお偉いさんを狙ってるらしいのね。それで、そんなところまで軍隊裂けないからって、国連を通じてアメリカがわたしを動かしたってそれだけよ」

「……ARS、はソマリア再解放連盟だよな。ICUってなんだっけ？」

「イスラム法廷会議」

即答したアリッサは、侮蔑の眼差しを彼に向ける。

「一般常識でしょ」

「戦争屋には、国際情勢は関係ないからなあ」

冷たい彼女の言葉にも臆することなく、ジョスリンは煙を吐き出して笑う。

「あそ……、情報を制する者が戦争を制するのよ」

サンダルを履いた細い足。

カバンからペットボトルを取り出した彼女は、キャップを外してから飲み口に唇をつけようとして動きを止めた。

瞳が鋭さを帯びる。

静かに。

すつと彼女の瞳孔が縮小する。

そんなアリッサの様子に、ジョスリンもあたりを警戒するように神経を研ぎ澄ますが、彼女は軽く肩をすくめただけだった。

「政治も経済も、治安も、なにもかもぼろぼろ！ ARSもICUも本当は、住んでる人のことなんてどうだっていいんじゃないの？」

フンつと鼻を鳴らした彼女は座っていたバイクのシートから飛び降りた。

幾重にも白い布を重ねたペチコートが風に揺れる。

アリッサの足元で土煙が上がった。

「国民のこと、なんてアリッサのほうこそ考えていなさそうだが」

「……わたしが？」

冷静な言葉を告げられて、彼女は無防備な横顔で彼を見つめた。

「そう」

「なんでわたしがソマリアの人間のことなんて考えないといけないのよ？」

考えるのは、その国に住んでいる人間の役目だ。

彼女はそう言う。

確かにそうだ。

ジョスリンもアリッサも同じくアメリカ人だ。
ソマリアの人間を思いやってやるつもりなど毛頭ない。

「あんたも言ったじゃない。戦争屋に情勢なんて知ったことじゃないわ」

与えられた任務をこなすだけだ。

そこにあるのはビジネスという契約だ。

不意に響いたのは軽機関銃の軽い銃声だ。

バラバラと連続した単調な音。

少女の足元に軽い振動を感じた。

アリッサとジョスリンはほぼ同時に地面を蹴った。

姿勢を低くして木の陰に隠れたジョスリンと、腰に吊したナイフを抜きながら斜面になっている地面に伏せたアリッサは、あたりの様子をうかがった。

聞こえてきたソマリ語の叫びに、ジョスリンは少女を見やる。

「おい、なんて言ってる？」

「殺してやるってさ」

短く応じたアリッサは、ジョスリンに肩をすくめてみせた。

確かに意味はそんなものだろう。

「本当に？」

確認するように告げた彼に、彼女は足音を聞きながら腰を落としながら立ち上がった。

「ホントよ」

腰に重心を落としながら、彼女は迷彩柄のワンピースをひらりとたなびかせる。

白いペチコートとのコントラストが愛らしい。

ソマリ語でなにごとか告げたが、さすがにソマリ語などさっぱりわからないジョスリンには何を言われているのかまではわからなかった。

推測だが、「止まれ」とかそんなところだろう。

「殺してやるって言われておとなしく殺される馬鹿はいないのよね」

あきれたような彼女の声に、ジョスリンも思わず頷いた。
そうだ。

誰だって命は惜しい。

両手で機関銃を構えた男に、少女はソマリ語でなにか言った。
短い彼女の言葉に、黒人の男は怒りの色を瞳に閃かせる。

「……なに言った？」

「やれるもんならやってみな、インポ野郎って言っただけよ」

金髪巻き毛の美少女が言うような台詞でもないような気がしたが、
さすがにそれについてはジョスリンは突っ込まない。

「まあ、確かに怒るな。それは」

アリッサがつま先で地面を蹴った。

軽く土煙が上がる。

銃撃が少女を追うが、少女の動きは男たちのそれよりも機敏で、
全く彼女を捕らえていない。

まるでアリッサの足跡の代わりに銃弾がついて回っているようだ。
そんなことを思いながら、ジョスリンもナイフを抜いた。

軽機関銃を構える男の真下に回り込んだ少女は、思い切り地面を
蹴るとそのまま飛び上がり銃身に向けて蹴り込んだ。

よるめいた男の心窩部にナイフをたたき込んだ彼女はそのまま男
の顔面に足をつくようにして体重を支えると後ろ手にナイフを引き
抜くと、ひらりと宙に舞うように倒れた男の後ろで銃を構える男に
飛びかかる。

パイロキネシスなど使わなくてもこれである。

彼女は充分に強い。

容赦なく男にナイフをたたき込んでいく彼女の肩を黒人男の太い
腕が捕らえようとしたのをジョスリンは見逃さない。

手にしたナイフを思い切り投げつけた。

ブーメランのように飛んだナイフが男の腕を重く切り落とした。
上がった悲鳴に少女は不快げに眉をひそめる。

ものの数分で十数人の男たちを制圧した彼らは、息も絶え絶えに

腰を抜かしている男を見下ろした。

まさか子供連れのライダーが、こんなにも強い二人組だとは思っていなかったのだろう。

ジョスリンが男の頭に軽機関銃を突きつけ、少女はナイフを首に突きつけている。

「あんたたちなんなのさ」

ジョスリンは理解していないだろうソマリ語でアリッサが黒人男に問いかけた。

「ICU？ ARS？」

どっちなのかと、彼女が問う。

突きつけられた武器と、冷ややかな少女の眼差し。

男のほうは体格を見れば相当鍛えられていることがわかったが、少女の強さは想定外だった。

少女を守って防戦一方になるだろうと、予測して攻撃をしかけたのだ。

それが、標的にした二人の、先に反撃をしてきたのは少女のほうだった。

「それとも、ただの物取り？」

乾ききった少女の言葉に、彼は言葉にならない悲鳴を上げるばかりだ。

圧倒的な存在感で、全てを凌駕する。

二人の無駄のない動きに感じたのは、二人がその道のプロだということ。

ワンピースのスカートの裾についた血痕。

「お、俺たちはICUとは関係ない……っ！」

悲鳴を上げた男に、アリッサはナイフを持っていないもう片方の手で肩にかかる金色の巻き毛を払った。

道沿いの斜面で戦闘などしては軍や警察が集まってきては元も子もない。

「あっそ。じゃ、殺しても何の問題もないわけね」

つぶやいてぱちりと指を鳴らした彼女は鋭く踵を返した。
燃え上がる。

生き残った男も、死骸も。
全てを焼き尽くす。

「行くわよ、ジヨス」

土色の建物。

青い空。

舗装もされていない道路が続いている。

機関銃を放り出したジヨスリンは、少女を抱き上げるとバイクに乗った自分の後ろに座らせる。

「しかし、暑くていやになるな」

「まっただわね」

息を吐いた彼女は男の腰に腕を回して目を細めた。

「しかし、A R S って I C U の後釜じゃなかったか？」

ホテルに戻ったジョスリンが、ソファに転がった少女を見やっ
つづやけば、少女は唇をゆがめた。

「組織の中は一枚岩じゃないってことよ。どこの国だってそう
でしよ。タカ派もいればハトもいる」

別段、盗聴を気にした素振りも見せずに彼女は言った。

盗聴に対する警戒はジョスリンの役目だ。

もつとも、盗聴されたところで彼女には恐ろしいものなどない。

「アメリカだって、A R S をなんとか押さえておきたいのよ。だ
から、表向きは険悪でも、裏ではなにやってるかなんてわからない
よ」

腹黒い策略が練られている。

「そりゃ、どの国だってそうだろう」

「ソマリアをぼろぼろにしたのはアメリカだわ。恨まれてたっ
て仕方ないわよね」

くつくつと笑う彼女に、ジョスリンは首を傾げた。

「じゃ、天下の火の鳥を動員してソマリアを焦土にしたほうが早
いんじゃないのか？」

「あのさ、焦土にするのはいいけど、その後どうすんのよ」

お互いを緩やかに懐柔しながら政権を樹立したほうが痛みは少
ない。

もつとも、二十年近い内戦が続いているソマリアは疲弊しすぎ
て、国家らしい形をもはや成していない。

「A R S も国連の支持する暫定政権を懐柔したい。暫定政権も A
R S を懐柔したい。それだけのことよ。でも、I C U にしろ A R S
にしろ一枚岩じゃない。そこが問題なのよ」

アリッサは冷静に指摘した。

目の前のテーブルの上に広がったソマリアの地図。

海に面したエチオピアとケニアにその国境を接した小さな国である。

首都モガディシユは暫定政権に統治されているが、それ以外の国土はARSによって支配されている。

異質な内戦の混乱が継続する国家。

近年では、インド洋、もしくはアデン湾での海賊行為が多発している危険な地域である。

「面倒な状況だな……」

「まったくよ」

そんな状況だからこそ、国際連合および、エチオピア側に就くアメリカ合衆国は軍隊を動かすことができない。

ARSの穏健派に懐柔していると、一部の過激派に悟られてはならない。

「ま、要するにさ、身から出た錆なのよ！ アメリカの！」

冷静に自国の失敗を指摘した彼女は、くると指先で金髪を巻き上げる。

「とりあえず、自分の住んでる国の弁護をしようって頭はないのか？」

「ない！」

ジョスリンに尋ねられてきっぱりと言いつつ彼女は、ちらりと電話を見やった。

電話回線は抜かれている。

「……アメリカなんて、どんだけ人のことを監視すれば気がすむのかしらね」

侮蔑。

そう。

今、このときでさえ、自分たちはアメリカという国の手のひらの上なのだ。

それがアリッサには気に入らない。

「まあ、嫌われたって当然なのよ。世界の警察を勝手に気取って、勝手にしゃしゃりでてくるんだからさ」

言いたい放題だ。

しかし、彼女は恐れてはいない。

嫌悪感を感じるがそれだけだ。

彼女の存在をアメリカ合衆国程度では制御できない。

それが彼女の強みだ。

指先で唇に触れた彼女は、地図を覗き込んだままで険しい瞳を改めない。

そこは危険な土地だ。

「さあ、過激派共はどう動くか」

「イスラムだから、自爆テロでもするんじゃないのか？」

気軽な彼の言葉に、アリッサは瞬きもせず大きな水色の瞳を上げた。

「信仰、というか宗教の力を馬鹿にしないほうがいいわよ」

自分自身はそんなものを信用していないというのに、彼女はそう告げる。

冷やかな彼女の言葉。

「……」

男は言葉を飲み込んだ。

公式に傭兵を依頼することもできないアメリカ政府が選んだのは、一匹狼で依頼を受ける傭兵だった。

もつとも、ソマリアに単身で乗り込むような命知らずなどそうそういるはずもない。

それゆえに、「火の鳥」と呼ばれる傭兵に白羽の矢が立った。

火の鳥であればどんな劣悪な戦場もひっくり返す。

その力を見込まれた。

「わたしに、ソマリアに行けっというの？」

少女は足を組んだ。

白皙の肌の、すらりとした子鹿のような彼女に、CIAの高官は疑いを隠せない目を彼女に向けた。

あたりまえだ。

アメリカ当局とはいっても、「火の鳥」と呼ばれる傭兵の真の姿を知る者は数えるほどしかない。

火の鳥の存在は国家機密に相当する。

だからこそ、彼女と接触できる人間は数少ない。

ほとんどの場合、仲介屋を通して彼女と接触することになる。

がんつと耳障りな音をたて、机に彼女の足が落ちた。

踵がテーブルにたたきつけられる。

「わたしに依頼したいなら、そういう目はやめてくれない？」

アメリカ合衆国からの正式な依頼だと言うから直接応対したのだ。

「申し訳ない……」

壮年の白人男はそれなりの地位にいる人物なのだろう。

その男が色を失っている。

火の鳥と異名を取る、最強の傭兵。

彼女が提示するギャラは破格だ。

そうそう簡単に火の鳥を雇うことなどできない。

もつとも、彼女が興味を向けた場合は若干事情が異なることもあるようだったが。

人間のひとりやふたりなど、簡単に殺すと恐れられる戦争屋だ。

「ソマリア再解放連盟の、指導者アブドゥール・アダンの暗殺計画が秘密裏に進められているらしい。その、暗殺計画を阻止してもらいたい」

「……ソマリア再解放連盟って、アメリカの目の上のたんこぶじゃない。なんで、その指導者のひとりをアメリカが守らなければならぬのよ？」

彼の言葉の意味を正確に把握した彼女は首をかしげた。

もつともな質問である。

「言わないとわからないか？」

やや顔色が良くない男に問いただされて、彼女は山猫のような笑みを浮かべた。

「……なるほど、そういうことか」

アリッサは笑うとテーブルを蹴り飛ばした足をひっこめた。ちなみに基本的に彼女は愛らしい衣服しか持っていない。

行儀悪くテーブルに踵を打ち下ろせばスカートの中など向かいにいる男には丸見えだが、彼女はそんなことを気にしていない。

「いいわ、でも相応の場所に行くんだから、ギャラはこっちの言い値を払ってもらう。いいわね？」

貴婦人のような姿の、小さな子供。

しかしその中身はひどく凶暴な殺し屋だ。

アメリカ政府の依頼で危険な任務に当たるのだ。

「……百億ドル」

告げた彼女に、男が驚愕する。そう。

彼女はふっかけると聞いた。

「……馬鹿な」

呆然と男がつぶやけば、少女は低く笑って、手首を翻した。

「いやなら良いのよ、わたしは依頼を受けないし、他の傭兵に依頼すればいいもの。でも、あんたはわたしの姿を知った。このまま生かして返すわけにはいかない」

冷徹に告げる。

ゆらりと彼女の周りの空気が歪んだ。

「わかった、少し待ってくれ……」

どこかに電話をかけた男は小声で誰かと話している。

しばらくやりとりを続けていたが、ため息をつきながら彼は電話を切った。

「わかった、百億払う」

「商談成立ね、明日の朝十時までに振り込みなさい。そうしなければこの話はなかったことにするわ」

彼女は告げると男を見やって玄関を指し示した。

さつさと帰れと、無言の圧力に男はカバンを掴むと転がり出るように彼女のアパートメントを出て行った。

そんないきさつから、彼女がソマリアでの依頼を受けるに至る。

そして、彼女が雇ったのは同じくアメリカ合衆国在住の傭兵であるジョスリンだ。

「……で、自分は百億で受けて、俺のことは百万で雇う、と」

「百万もらえるんだからいいじゃない」

「フーンと顎を引き上げて彼女は胸を反らす。

「それで、アブドゥール・アダンっていうのは、どいつだ？」

「こいつよ、この年寄り」

彼女が指さした先の写真には、一見穏和そうな男が写っている。

もつとも年寄り、と彼女は言うがいわゆる老人ではない。

せいぜい五十代といったところか。

「一応、ソマリア再解放連盟の穏健派ってことにはなってるけど、結構腹黒いのよ」

アメリカ政府と、国際連合、かつてのICU、そしてARSの過激派を相手に腹の探り合いを演じている男だ。

駆け引きに身を投じた穏健派。

彼らは、互いに相手の最良の一手を引き出そうとしている。

だからこそ、アメリカはその接点でもあるアブドゥール・アダンのにこだわるのだ。

「どちらにしろ、黒の裏は白じゃないのよ。黒の裏も黒。腹黒い連中ばかり」

世界を動かしているのは清らかな存在ではない。

悪へと向かう。

「なるほど……。そういうわけか」

「ジョス、終わらせるまで帰れないわよ？ それで大丈夫？」

「もつ、あんたから金は受け取ってるからな。よしみだ、つきあうさ」

男が笑った。

「ところで、盗聴されてる様子はなかった？」

「エシユロン以外は大丈夫だろう」

「それは結構な監視なこと」

彼女はふつと笑うと指先に巻き付けた金髪に唇を寄せる。

「そっいや、あんたの保護者は帰ったらしいぞ」

「でしょうね。あんなのがいたらアメリカが動いてるのがバレバレだものね」

想定内だと告げる彼女はそうして、ジョスリンの差しだしたサンドイツに手を伸ばした。

「まあ、なんとかなるでしょう」

「今回、わたしたちが相手をするのは、A R Sの前身、I C Uの残党なんだけど、こいつらが暫定政権にすり寄るA R Sを面白く思っ
てなくて、それで、その指導者層の一人であるアブドゥール・アダ
ンの暗殺計画が持ち上がったってわけ」

地図を見つめる少女に、ジョスリンは首を傾げた。

「で、そのアダンって言うのは今はどこにいるんだ？」

「……なんで、わたしがモガディシユに来たと思ってるの？」

あきれたような彼女の言葉に、ジョスリンは肩をすくめる。

ソマリアの首都、モガディシユ。

またはモガディシオと言う。

ソマリア最大の都市であり、その人口は170万人を擁する。

「まあ……、そうだな」

彼女の言いたいことを受け止めて、ジョスリンは息を吐いた。
要するに「そういうこと」だと彼女は暗に告げる。

護衛する標的も、敵対する者も、モガディシユにいる、というこ
とだ。

少女姿の傭兵。

しかし、姿は少女であっても中身までそうであるとは限らない。
かつて、アフガニスタンで泥沼の戦場を駆け抜けた少女。

彼女の勇姿はまぶしすぎる。

ジョスリンは彼女の正確な年齢も、出生も知らない。だが、アフ
ガニスタンで共に戦闘をくり抜けた時、彼は彼女に圧倒された。
火の鳥。

そう呼ばれる傭兵。

黄金の巻き毛の、水色の瞳の白人少女。

「ところで、その、なんだっけ？ アブドゥール・アダンって言う
のは、アメリカさんが護衛しようとしているのは知ってるのか？」

「知らないわよ」

あつさりと告げたアリッサにジョスリンは驚いた様子だったが、
当の少女自身は感慨もなさそうに肩をすくめただけだ。

「あんたがいちいちなんでもかんでも聞いてくるのが、すっごい
ざいんだけど」

瞳を上げた彼女に男は鼻の頭をかく。

大男、と言つてもいいだろう体格にの青年にしかし、彼女は動じ
ない。

冷めた瞳で彼を見た小さな少女は、そうしてから口元をゆがめた。
静かに立ち上がり、バルコニーに出る。

高さの低い建物が多い街だ。

国民の人口と、市内の人口を計算すると、国民の四分の一ほどが、
モガディシュに住んでいる計算になる。

それほど、ソマリアでは大きな街だ。

海辺の街。

ソマリア最大の街とも呼ばれる理由。

アメリカなどの先進国とは全く様相の異なる顔を持つ街。

ホルターネックの迷彩柄のワンピースは背中の露出度が高い。

もっとも露出度が高いとは言つても所詮は、子供のスタイルの彼
女だ。

驚くほど色気はない。

水色の眼差しが街を見つめている。

「どいつもこいつも危なっかしいわね」

銃を平然と背中に背負う者もいる。

武装組織の人間か、体格が良い者もいる。

隠したところで、同業者に隠し通すことなどではしない。

アリッサの瞳は正確に「異質な」人間たちを見破った。

「どうする？」

「紛れ込んでいるのは確かなようね」

ジョスリンに尋ねられて少女は声のトーンは変えることもなくつ

ぶやいた。

「問題の連中が、どいつかってことだけど、きっとアブドゥール・アダンの周りで問題を起こす。それで見極められるでしょ」

ICU過激派のように統率された武装集団も多いが、いわゆる盗賊団のような組織もある。

もっとも、ジョスリンらにしてみれば、統率された武装集団と、そうではない犯罪集団など見分けることは簡単だった。

簡単なことではあるが、そこで問題は発生する。

アリッサが告げたように、決して一枚岩ではありえない。

だからこそそこに歪みが生じる。

「血気盛んなだけの馬鹿が、勝手に動き出すと厄介なのよね。一網打尽にできれば面倒くさいことにはならないんでしょうけど」

少女はテラスからホテルの入り口に面した歩道に視線をおろした。

黒人の男と視線が交錯する。

鋭い眼差しの、筋骨逞しい男だ。

おそらく、互いが互いを異質な者として認識した。

「ふうん……」

黒人の男とにらみ合うようにしながら彼女は口元だけでつぶやいた。

その横顔は変わらない。

細い背中。わずかに斜に構えた彼女の横顔。

なにを思っているのか。

「……どうした？」

「なんでもないわ。今のところは、ね」

含みを持たせた彼女の物言いに、ジョスリンは立ち上がる。

ホテルに彼女を置いていっても問題ないだろう。

彼女ひとりでも犯罪組織のひとつやふたつは余裕でつぶせるだけの實力を持つ。

「俺は、もう一度外にいつてくる」

「いつてらっしゃい」

わたしは寝てるわ。

彼女はそれだけ言っているとガラス戸を閉めた。

カチリと音がする。

ジョスリンはそんな彼女を横目にしてナイフを一本腰に吊すとホテルの部屋を出た。

砂にまみれた街。

この国は未だに内戦で苦しんでいる。

子供も、女も、老人もだ。

貧しいアフリカの国家とも呼べない国家は、そうして貧困に喘ぐ国民を抱えていた。

アリッサの様子から察するに、恐らくソマリアには彼女特有の伝手はないのだろう。

もしかしたらあるのかもしれないが、どちらにしたところで今回の任務で頼りになるのは自分と、そしてアリッサ・ノースウッド、火の鳥自身だ。

煙草に火をつけながら道路の端を歩く彼は、やはりどこか奇異に映るのか、街を行き交う人間たちは誰もが彼をじろじろと好奇心に満ちた眼差しを向けた。

中には彼に物乞いをする者もいるが、そんなものにジョスリンは流されない。

そっけなく突き放すのは、物乞いなど相手にしては切りがないというだけの理由だ。

「俺はヒーローじゃない」

英語のつぶやき。

ソマリアの貧しい人間たち全員を救えるわけではない。
自分に課せられた任務は唯一。

火の鳥の護衛。

アブドゥール・アダンの暗殺計画の阻止を狙うのは火の鳥の仕事だ。

火の鳥と呼ばれる傭兵は、無敵ではなく、最大の弱点を抱えてい

る。

小さな体は、膨大な負荷には耐えきれないのだ。だからこそ、彼女はジョスリンのような同業者を雇う。

自分自身の弱点を理解していればこそだ。

ぶらぶらと街中を歩く彼に声をかける者は、物乞いくらいだ。

よそ者がきた。

そんな無粋な眼差しだけが突き刺さる。不意に奇声が聞こえた。背後から感じた気配に、彼は無言のまま体を右に傾けた。頭上を黒い腕がナイフを握って通り過ぎていく。

観光客などいないが、他国の人間相手の物取りかなにかかも知れない。

どちらにしろ、物騒な話ではあつてジョスリンは通り過ぎた腕を掴み上げるとそのまま黒い手首を掴み締めた。一気に力をこめる。

無様なソマリ語の悲鳴が上がって、ナイフは地面に落ちた。

見たところ単独犯のようだ。

「怪我したくなけりや、ひとりでかかってくるようなことはしない
ほうが身のためだ」

彼は男の胸ぐらを掴んで一気に引き倒す。

訓練もろくに積んでいない犯罪者など、片手で伸す程度など簡単なことだ。

ジョスリンは男のみぞおちに重い拳をたたき込んでから、その頭に足をたたき落とした。

砂の地面に男の顔がめりこんだ。

悲鳴もろくにあげられないまま失神した男の姿を見ていた街の間たちは、恐れるような眼差しでこそそこそとなにかを話し合っている。

外国人など良い鴨だとも思つたのだろう。

しかし、殴りかかった相手はナイフの存在にもものともせずになんと相手をねじ伏せてしまった。

ほとんど声も上がらなかった。

手を打ち合わせて砂を払った彼は、やれやれと息をつく。

「しかし、外国人に対してこんなことばっかりしてるから、ソマリ
アは危険だと思われるんだろうに」

海賊行為にしたところで似たようなものだ。

もともと彼らとしても生きるために必死なわけであって、政府の
人間にまともな人材がそろっていないことと、なによりも政府にそ
れだけの権力がないことから、このような事態に陥っているのだ
る。

力には力を。

そうでなければ生き残れない。

善良な人間が苦しむばかりだ。

それが、今現在のソマリアの現状。

くわえたままの煙草を地面に捨ててブーツのつま先で踏みつぶす。
ジョスリンは青い空を見上げてから、額に手を当てた。

じりじりと焼き尽くすような太陽に、彼は額の汗を拭う。

一年を通じて三十度前後の気温の地域。

「のんきなお嬢さんだ」

アリッサの瞳を思い出して彼は笑った。

ジョスリン。

名前はジョスリン・R・ウィルクス。

それが本名だ。

軍人上がりの傭兵で、彼の戦闘技術はその世界でも群を抜いている。

そんな彼が街でアリッサと共にいたところを軍隊時代の友人に目撃されて、「泣く子も黙るグリーンベレーが今度は子供のお守りか」と揶揄されたものだ。

生まれはテキサスで恵まれた体格と、恵まれた身体能力によって彼は的確に任務を遂行してきた。

そんな彼が退役してから、アフガニスタンで出会ったのが傭兵「火の鳥」だった。

傭兵と言えば、屈強な男たちになるものだと思っていた。

しかし、ジョスリンがアフガニスタンで出会ったのは少女にもなっていないかと思われるような、小さな体の子供だった。

金色の巻き毛の、白人の小さな子供。

写真を撮られることを彼女は極端にいやがった。

あたりまえだ。

自分の姿がどこに残って困った事態になるのは、彼女自身だ。

「火の鳥だとは言わないさ」

だから写真を撮らせてくれと、彼は言った。

戦友と写真を撮るくらいいいではないかと。

そんなことを言った彼に、少女は折れた。

意外なことに、カメラを向けられて少女は花のような笑顔を向けた。そんな彼女を抱き寄せて同じ写真に写りこむ。

「これでいいでしょ、これで」

そんな火の鳥と呼ばれる少女の、圧倒的な強さに彼は隷属した。

アリッサの戦う姿の目の当たりにした人間はほぼ例外なく彼女に惹かれるだろう。その強さに魅了されるか、もしくは忌避の感情を示すか。

自分自身の生命を燃やすようにそこにいる彼女。

アリッサと名乗る小さな少女。

火の鳥と知り合って、ジョスリンは今まで自分がいた世界がどれほど小さなものだったのかを知らされた。

自分より強い人間がいることは最初から承知していたが、それをまざまざと見せつけられたこと。

「俺は、井の中の蛙だな、まるで」

もつとも、彼はいい気になっていたわけではない。

ただ、自分より強い人間になど会ったことがなかったただけだ。

ジョスリンは。自分自身よりもずっと強い相手になど関わったことがなかった。

それほどまで、アリッサは異質だった。

「……アリッサ」

黄金の巻き毛の、小さな少女の姿の傭兵。

普通の人間たちとは違う世界にいるジョスリンにとって異質だということとは、どれほど一般的な人間とかけ離れた存在であるのかということだ。

アリッサはそういった人間。

誰よりも異質で、そして特異だ。

ふと、声が聞こえた。

アメリカ人には聞き取り慣れない英国英語だ。

「……おじさん、気をつけて」

薄闇に染まる夕暮れ時。

長い薄手の外套を着た若い女がいた。

「あ？」

ジョスリンが振り返ると若い女は、くるりと踵を返して歩きだした。

目深にかぶったフードを押さえている。
指先が白い。

振り返った唇がそつと告げた。

「気をつけて。巻き込まれるわ」

白人だ。

「どういう意味だ？」

抽象的な彼女の言葉に、ジョスリンは首を傾げた。

巻き込まれる、と彼女は告げる。

言いおくようにして女は歩きだした。

足早に。

その肩に彼は手を伸ばした。

「……まっ！」

待て、と言おうとしたジョスリンの視界を邪魔でもするかのように、一陣の風が吹き抜けた。

暑いソマリアで、ぞつとするほど冷たい風だ。

それは何かとか、なぜと思う時間すらないまま。

風が吹き抜ける。

思わず目を閉じた彼が視界を取り戻したとき、外套を着た女は消えていた。

まるで存在そのものが幻でもあったかのように。

煙のように、消えた。

「……気をつけて」

耳打ちする。

誰の声かもジョスリンは知らない。

これは誰だと思う間もなく、その声は意識の外へと消えていく。

まるで天使のようだと、彼は思った。

もちろん、現実主義のジョスリンは天使などいるはずがないことも知っている。

わかっていて、男は「天使の声」だと、そう思った。

ホテルに戻ると、ベッドに横になった少女がうつ伏せで眠っていた。

天下の「火の鳥」に手を出すほど、彼はうぬぼれてはいないし、なによりも、手を出したいと思えるような魅力的な肉体など、彼女は持っていない。

大きなベッドで眠るアリッサを彼はソファに座ったままで見つめている。

彼女の体は、幼い子供の持ち物。

誰しもが、成長の過程で必ず手にするものでありながら、いずれ手放していく。

わずかな時間だけの。

そついった持ち物だ。

規則的な呼吸の音。

ジョスリンは、アリッサに信頼されている。

「一応の信頼」というひどく曖昧なものだったが、それはやむを得ないだろう。

彼女は、心からの信頼など、誰にも傾けない。

アリッサが信じるものは、ただ一つ。

自分だけだ。

無関係の人間がそれを知れば、彼らはそれを「悲しい」ととらえるかも知れない。

しかし、彼女はジョスリンが知る限り、誰よりも深く心を傷つけられてきた。

人の心とは脆い。

それを男は知っていた。

屈強な男たちですら、戦場で心を病むのだ。

彼女が「子供の頃」から知己であるジョスリンにはわかりきっていた。

発達途中の子供の幼い精神が、傷つけられ、幾度となく過酷な状況に晒されて、正常でいられるわけがない。

だというのに、アリッサはその強さで固い殻を作り出し、心に負った深い傷を隠し続けた。

その傷を、誰が知っているだろう。

彼女に関わる人間たちは、アリッサの狂暴性に覆われた心に誰も気がついていないのではないだろうか、とすら思う。

なぜ、とか。

どうして、といった問いかけは、彼女からはない。

あるわけもない。

彼女の虐げられ続けた心は、まるで血を流し続ける傷跡のように。

「……どうして、あんたは」

ジョスリンはぼつりとつぶやいた。

彼の思いは決してアリッサに届いてはならない。

決して知られてはいけない。

決して、その心に触れてはならない。

その高潔な心を慈しんではならない。

そうすれば、彼女の心は壊れる。

受け入れられないものを突きつけられれば、決壊する。

それを、ジョスリンは知っていた。

おそらくは、外見通りに彼女は自分よりも年少である。しかし、

彼女は外見通りの年齢などでは決してない。

眠る少女を横目にしたまま、彼は薄闇に染まっていく窓の外を見つめた。

赤茶けた町の風景。

ソマリアの首都、モガディシユ。

平穏とはいいがたいその町はそすして夕闇に包まれていく。

手元に拳銃の固い感触を感じながら、彼は目を閉じた。

モガディシユのあるホテルの一室に猛獣が二匹、静かに眠る。

息を潜めて。

翌朝、早くに目を覚ましたのはジョスリンだった。

相変わらず、アリッサはベッドで丸くなって眠っている。

その姿をほほえましいと思うか、もしくは、警戒心を抱くかは見た人間によりけりだろう。

ジョスリンはその姿を愛らしいと思う以前に、野生の獣のようだと思った。

にじみだした警戒に、彼は顎に手を当てる。

詰めていた息を吐き出す。

吐息に、少女の頭がかすかに動いた。

「……アリサ」

低い声をジョスリンが吐き出しても、しかし彼女は目覚めない。

冷房の寒さから無意識に毛布を引き寄せたのだろう。

毛布にくるまって眠っているアリッサに、ジョスリンはほっと息をついた。

音を立てずに、足を忍ばせて彼は浴室へと向かった。

洗面台に立ち、髭を剃ろうとして鏡を見やる。

その鏡に、ふと映ったのは若い女だ。

黒い髪を垂らした、血塗れの東洋系の女。

ジョスリンの背後に、亡霊のように立っている。

驚いて身を退いた彼は、とっさに振り返るが女の姿はない。当たり前だ。

その部屋にいるのは二人。

ジョスリンとアリッサだけ。

ジョスリンは言うまでもなく白人男で、そうしてアリッサは幼児にも似た小さな幼い子供だ。

背後に立っていたのは東洋系の若い女だが、アリッサほど若い姿ではない。

おそらく十代後半か、もしくは二十代前半だろうと思われた。

背後に誰もいないというのに映った血塗れの女。

それは幻覚だったのだろうか。

呆然と、視線を鏡に戻した彼は改めてまじまじと鏡を見つめるが、そこには若い女の姿はない。

鏡を見つめる自分と、そうして背後の壁が映し出されるばかりだ。
「俺も大概恨み買ってるからな……」

苦笑した。

亡霊など信じてはいないが、自分が殺してきた人数を思えば怨恨を買っていてもやむを得ないだろう。

髭を剃り、身支度を整えた彼は装備を確認する。

彼はアリッサのように丸腰同然で戦えるわけではない。

少なくともアリッサと比べれば彼は凡人だ。

容赦なく鉄の音をたてる彼に、少女の声が響いた。

「……うるさい」

確かにうるさいかもしれないが、そうも言っていられない。

「起きたか」

「ガチャガチャと、そんな音を朝っぱらからたてられて寝ていられるわけないでしょ」

もつともない分だ。

しかしジョスリンは動じない。

「仕方がないだろ」

振り返ったその先に、ベッドの上で這うように体を起こす少女がいた、はずだった。

ベッドの上には血の気の失せた金色の髪の若い女がいる。

その顔に浮かんでいるのは、死相だ。

「……っ！」

「ジョス……」

響いたのは少女の声。

我に返った彼に、アリッサは訝しげな眼差しを向けていた。

「悪い」

「アメリカ陸軍のご自慢の特殊部隊でも幻覚を見るとか？」

揶揄するような彼女の声に、ジョスリンはぎくりと肩を揺らした。彼女の言っていることが、理解できない。

アリッサが知っていること。

それはなんだろう。

「今はグリーンベレーじゃない」

強ばった彼の声に、少女が失笑した。

「冗談よ」

彼の隣に座りながら彼女は首を傾げてから、男を見上げる。

水色の瞳が彼を射抜いた。

「でもね、ジョス。世界は知らないことばかりなのよ」

意味深長なアリッサの言葉に、彼は言葉が見つからない。

「わたしも、知らないことがたくさんあるもの」

そう言ってアリッサはにっこりと笑った。

「……そうだな」

一瞬の沈黙の後につぶやいたジョスリンを、そっと見つめた彼女はそうして視線を浴室へと向けてから、立ち上がった。

昨日から着ている迷彩柄のワンピースは相変わらず血痕がついていたが、彼女はそれに気を使っているようにも感じられなかった。

口の中で、そろそろね、とつぶやいたがその声は彼には届かない。どちらのしたところで、彼女の見えている世界は常識的な人間が見ている世界とは異なるのだということだ。

高らかに、彼女は両腕を開いて全てを受け入れる。

その強さに誰もが焦がれ、そうして誰もが彼女を誤解した。

災厄は、そうして降ってくる。

まるで天から降り注ぐ炎の矢の如く。

世界の表側で生きる人間がいれば、その逆の人間がいる。

世界を動かすのは、どちらの人間なのだろうか。

そんなことをジョスリンが考えたとき、ホテルの廊下に足音が響いた。

重いブーツの足音に、アリッサがまるで身構える豹を思わせる勢いでソファから飛び降りた。

ジョスリンも彼女に倣う。

神経を研ぎすます。

なにひとつとして見落とさないように、彼らはそつと空気を伺った。

足音はやがて彼らの部屋を通り過ぎた。

悲鳴と、銃声。

自分の唇を指先でたどったアリッサはそつして、歩き出す。

絨毯の上を足音もたてずに歩く姿はまさにハンターそのものだ。

「アリサ」

「言っておくけど、わたし、正義の味方じゃないからね」

「ごもつとも」

冷めた眼差しのままジョスリンと同じことを考える彼女はやはり傭兵なのだ、と。

尋常ではない威圧感を漂わせながら、彼女はそつと廊下へと続く扉へと耳を押し当てた。

「どうだ？」

「ソマリア人ね、なにかしら……」

アリッサはひとりごちる。

「物取りかなんかか？」

「さあ？」

ジョスリンに尋ねられてアリッサも首を傾けた。

「よく聞こえない」

言葉がわからない、とは彼女は言わない。

ソマリ語すらも流暢に操る彼女だ。見栄ではないだろう。

銃撃の音と、悲鳴と、そして入り乱れる叫び声に、よく聞き取れないのだ。

アリッサはそつしてそつとドアノブを回した。

同時に、扉はひどい衝撃とともに蹴りあけられた。

少女の鼻先で開いたそれに、ジョスリンは機関銃を構え、アリッサは思いきり苦々しく眉をひそめる。

やばい、と思ったのはジョスリンだった。

思わず頭を抱えるようにしてソファの陰に体を潜めた。

侵入者たちには、銃を持ったテロリストを恐れて白人男が身を隠したように見えたかもしれない。

真相は、もちろんそんなものではなかった。

アリッサの体から陽炎がのぼった。

ばかり、といやな音が響いた。

その音を、いったい何人の人間が「音」と認識しただろうか。

おそらく、ジョスリン以外の人間は誰もそれを異様な音だとは認識していなかった。

認識する時間すらもなく、飲み込まれた。

凶暴な、火の鳥に。

ドンツと音とも思えない音が響く。

次に、彼らを包み込むのは火柱だ。

一寸の狂いもなく、彼女の目の前でソマリア人の男たちが松明のように一瞬で燃え尽きる。

彼女が「火の鳥」と恐れられる所以だ。

アリッサは正確に炎を操りこなす。

「相変わらず派手なことだ」

ジョスリンの嫌みにも似た言葉に、アリッサは肩をすくめるだけだ。

「ちゃんと加減してるわよ」

「さようで」

人間だけを燃やし尽くす。

確かに加減はしているのだろう。

ホテルの被害は絨毯程度である。

しかし、ジョスリンの内側には疑念が残った。

彼らはいったいなんだったのだろうか、と。

「ICUか？ 今のは」

「そんなわけないでしょ。ただの武装グループよ」

あっさりとジョスリンの言葉を否定したアリッサは金色の巻き毛をくるくると指先に巻き付けた。

ただの武装グループ、というまるでなんでもない出来事でもあるかのような、アリッサの言葉はやや異質だ。特に大した感慨も受けていないような彼女の台詞。

実際にアリッサはなんにも感じていないのだろう。

「外国人が多く宿泊してるホテルを狙ったのは資金集めかなんかのためでしょ」

アリッサの言葉はにべもない。

確かにそうなのかもしれないが、あまりにも断言的な言葉にはさすがにジョスリンも犯罪者に同情した。

「……なるほど」

部屋の外にでた、アリッサは、廊下の先に昨夕見かけた瞳の鋭い男を認めてから、かすかに目を細めた。

「アリサ？」

「なんでもない」

彼女はそうして長いまつげを伏せた。

なにを思っているのか、他者には知ることなどできない。誰も火の鳥と呼ばれる、最強の傭兵を知ることなどできないのだ。

最強と呼ばれる、火の鳥。

「行くわよ」

短く告げた少女に、装備を手にしたジョスリンは立ち上がった。やるべきことはただひとつだ。

ジョスリンが火の鳥に雇われた理由はただ一つ。

火の鳥の護衛。

最も危険な任務に就く彼女は誰よりも危険に晒されている。

ホテルを出たジョスリンとアリッサは、相変わらずほこりっぽい街の様子に目をすがめた。

よそ者に対する険しい眼差しに、可憐な少女と屈強な男は互いに目を合わせてから肩をすくめた。

彼と、彼女は同格などではない。

どれほどジョスリンが歴戦の勇者であっても、彼はアリッサにはかなわない。

それが二人の間に横たわる距離だ。

もちろん、戦士として、もしくは兵士として、男は無能なわけでもなければ、低脳でもない。ジョスリンは百戦錬磨だ。

しかし、それでも彼は彼女には届かない。

その差異はどこから生まれてくるものなのだろうか。

ジョスリンはどこかまぶしそうに少女の背中を見つめた。

彼女は、彼が失ったものの多くを持っている。しかし、なにを持っている、なにを失ったのか。それすらジョスリンは忘れてしまった。

「……なに？」

眼差しを受けて金色の巻き毛の少女は振り返った。

ジョスリンの瞳と、アリッサの瞳が交錯した。

「なんでもないさ」

男が広い肩をすくめれば、少女は小さな顔を傾けてから不審な眼差しのままでほえんだ。

愛らしい少女。

しかし、その正体は殺人鬼であり、命を絶つことをためらったりすることのない傭兵である。

「バイクをとってくるから待っていてくれ」

「はい」

白人の少女は笑うと重い装備の入ったカバンを持つ男の背中を見送った。濃い緑色のベレー帽をくるくると指先で回して、彼女は口元だけで微笑する。

まるで、それはこれから起こる事を予見してでもいるかのような表情だった。

混乱した国にあつて、彼女はただひとり路上に残されても動じない。

数多くの、戦場を駆け抜けた彼女に恐れるものなどなにひとつとして存在しない。彼女はまっすぐに人の生死を見つめている。

まるでそれが自分のつとめだとも言うかのように。

「それは、名誉になつて……？」

アリッサは独白する。

自分の立つ場所を見極める。

正確に。

それは生き残るための能力であり、手段。

戦場で生き残るには、それ相応の状況分析能力と、同時に非常に高い水準の戦闘能力が要求される。

身体的に不可能な行動以外の、あらゆる能力を彼女はその小さな体に備えていた。

強靱である、ということとはそういうことだ。

強くしなやかに伸びる。

まるで鞭のようだ。

「……相変わらず、物騒ね」

火の鳥と呼ばれる少女の体がふわりと中空を舞った。

太い男の腕を、音もなくよけた。

動揺のひとつも見られない。

細い腕が伸びる。

まるで風をとらえるように、少女は指を開いた。つま先で地面を蹴り、軽やかにステップを踏む。

その姿は、まるで風の精霊のようだ。

指先から、髪の毛の先に至るまで、彼女は完全に計算している。
伏せられていたまつげが上がった。

「愚かね」

至極冷静に彼女がつばやいた。

白昼堂々、彼女は衆目の面前でアリッサは存分にその戦闘技術を披露する。

指先の間に隠し持たれた暗器。

小さな小刀だろうか。

襲いかかる男に、少女の指先が凪いだ。

血の洗礼を。

体の大きさだけが戦闘を決めるのではない。

能力の有無だけが、勝利を決するわけではない。

誰よりも強いからこそ彼女は常勝にして無敵。彼女が最強の火の鳥と呼ばれる所以だ。

アリッサの戦闘能力は常人のそれを越える。常識にとらわれることのない強さを持つからこそ彼女は他者を凌駕するのだ。

突き出された太い腕を体をひいて躲した彼女は、下から上に大きく自分の細い腕を振り上げてそのまま横に軽く飛ぶ。背の高い男の襟首に腕を伸ばした。

同時に振り返った男に、彼女はにやりと笑う。

そのまま一気にみぞおちに向けて蹴り上げると、駆け上がるような動作で空中で回転した。もちろん、重量の軽い彼女のその程度の行動では、男にダメージを与えることなどできない。アリッサにもそんなことはわかっていて。

つかみかかる男がバランスを崩した隙に、指の間に挟んだ小刀でおとこの首を切り裂いた。

ドドドと重いバイクのエンジンの音が響く。

血しぶきにまみれた地面に立つアリッサはその音に顔を上げる。

「……遅いじゃない」

不機嫌な彼女の声に、ジョスリンは肩をすくめた。

「その間に男をひとり殺しているとは思わなかったぞ」

まるで踊るような動きで男をひとりなぶり殺しにした少女を、誰もが遠巻きに見つめていた。

アリッサに声をかけるのは、ジョスリンくらいだ。

「手を出したこいつが悪いのよ」

冷徹に言い放つ彼女は男に差し込まれたタオルで小刀についた血液を拭くと、無様に痙攣を繰り返している男の上に、無造作に落とす。

「そりゃまあ、そうだろうが、相手だってまさかあんたが火の鳥だなんて思ってたないだろ」

「相手を見て、自分との力量差がわからない程度のぼんくらってことでしょ」

見事に切って捨てるような彼女の言葉に、ジョスリンは周囲を見回した。

「ぼんくら、ねえ……」

「なに納得できないような顔してんのよ」

「いや、なんでもない」

彼女の腰に腕を回した彼は、手早く彼女を自分の後ろに乘せるとバイクのエンジンを噴かした。

誰も彼らを追わない。

人殺しのよそ者を追う人間はいない。

そこはそういう街だ。

アリッサはジョスリンの腰につかまったままで、ふと路地に潜む男の影に気がついた。

黒人の屈強な男だ。

ホテルのバルコニーから。

そして、先ほどの武装グループの襲撃の際に、廊下の先に。そこから彼女を見つめていた男だ。

アリッサは舌打ちした。

「なんだ……？」

ジョスリンの訝しげな声に、彼女は目を閉じてからその背中に顔を押しつけて表情を隠す。

「質問を許してなんてないわ」

冷ややかに彼女が告げる。

「左様で」

ジョスリンは、ぞんざいな彼女の言葉にそれ以上の追求はせず息をついた。

バイクは二人を乗せて走り去る。

歩道に、男の死骸を残して。

「彼らは敵です」

男の声が響いた。

若い男の声だ。

「……敵？　どここの敵だ？　エチオピアか？　それとも内部の人間か？」

「わかりません」

苦渋に満ちた青年に、中年の男は冷ややかに笑う。

「敵じゃないのかもしれないだろう」

「……いえ、敵です。どのような理由かはわかりませんが、彼らは確かな判断材料をもって、敵を選んでいる」

必死で訴える青年は、二人の白人たちを思い浮かべた。

「男のほうは、特殊な訓練を受けています。女、……子供のほうは、魔女です」

魔女。

彼はそう表現した。

アフリカ大陸にあつて、そういった説明のほうを受け入れられやすいのは、未だに識字率すら先進諸国に及ばないからである。

民間信仰をベースにした説明のほうが、ある意味では受け入れられやすい。

「……わたしを馬鹿にしているのかね？」

中年の男は低く告げた。

その声色には怒気が宿っている。

「魔女など、今時いるわけがないだろう」

苦々しい彼の言葉に、それでも青年は反論した。

「お忘れですか！ 魔女は存在します。魔女アジヨラがアフリカを支配していたことをお忘れなのですか！」

魔女アジヨラ。

かつて、ザイルルの魔女と呼ばれた世界最強の魔女だ。

「黙れ」

中年の男は途端に不機嫌な表情を浮かべる。

思い出すのは、老婆だ。

甲高いしわがれた声で笑っていたアジヨラ。

「アジヨラはもういない」

世界最強と呼ばれた魔女はすでに死んだ。そして、その名前を継ぐ者もないはずだった。

アフリカ大陸を恐慌に陥れた呪術師はもう存在しないのだ。

「おまえの言う、アメリカ人が魔女かどうかなどどうでもいい。しかし、現代で魔女などいない。そんなことを言う人間が未だに山ほどいるおかげで、アフリカは時代に取り残された遅れた未開の地だと言われるんだ」

欧米諸国はおるか、アジア諸国にすら見下される。

その事実が男にとつておもしろくない。

あたりまえだ、そんな状況を楽しく感じるアフリカ系黒人などいないだろう。

あげくに差別の対象になどされているのだ。

肌の色が違うという理由だけで。

中年の男は、不機嫌に手を振った。

出て行けと言う合図だ。

それでも出て行かない青年に、男は口を開いた。

「出て行け」

「……しかし」

「出て行けと言っている」

魔女アジヨラ。

アフリカ大陸を影から支配したブードウーの支配者。しかし、その力を権力者のためなどに振るうことはなかったが故に、多くの暗殺者たちから狙われた。

中年の男はゆるくかぶりを振って、革張りのシートを回して窓の外に視線を投げかけた。

現在のソマリアには旧イスラム法廷会議の穏健派勢力が主導するソマリア再解放連盟と、国際連合主導によって支持される暫定政府とが互いににらみ合う状況が続いている。

それゆえに、「ソマリア」と呼ばれる内戦地帯には正式な国号は存在しない。

ただ、「ソマリア」とそのように呼ばれるだけである。

一九九一年に内戦が勃発したために国土は分断、ソマリア共和国は事実上崩壊した。それ以降、国土を疲弊させ、国力を消耗させる内戦が継続する。

世界において最も危険な国と呼ばれられる。

警察機関も司法機関も正常に機能していない国など犯罪の温床であり、数多くの武装集団が国内には略奪、自治などの目的でひしめきあっている。

もしくは、そこは国家とはたして呼べるのだろうか。

思想をもたない傭兵たちですら好んでかの国に介入しようとする者は少ない。傭兵とは戦争屋だ。

戦局が悪化すれば真っ先に切り捨てられる。だからこそ彼らは注意深く依頼を探る。

アメリカ合衆国にあつて火の鳥のように圧倒的に敵を蹂躪する傭兵の方が奇特なのだ。

裏社会のトップクラスにあつてすら、火の鳥のような他者を凌駕する実力を所有する傭兵は数少ない。

彼らが信用するのは自分自身だけである。

自らの全てを賭して戦場を駆け抜けた。

アリッサは目の前の屈強な男の腰に回した腕に力をいれて、体を支えると思いに沈む。

「気が散ってるな。アリッサ」

告げられて彼女は眉を寄せる。

「なによ、わたしが考え事してたらなんか問題でもあるっていうの？」

つつけんどんな彼女の言葉に、ジョスリンはかすかに笑った。

別に悪いというわけじゃない。

そんな彼の言葉に、侮蔑したような眼差しをジョスリンに向けた少女は手を伸ばして男の金色の髪をひっぱった。

「おい……」

バイクの運転中に意識を散らされて抗議の声を上げる大男に、巻き毛のブロンドが印象的な少女はフンと鼻を鳴らした。

「なによ、このくらいで操縦ミスするようなボンクラなわけ？」

冷たい言葉を彼女は突きつける。

そうだ。

彼女が行動を共にするのは水準以上の能力を持った兵士ばかりである。

多少の戯れでは動じない。

まるで岩のように。

「ボンクラとはご挨拶だな」

男の言葉に彼女は唇の端をつり上げた。

「あんたが、くずじゃないってことは知ってるわ。一応ね」

百戦錬磨の兵士に対してひどく無礼な言い方だがそれを彼女は気にしない。

そして男も、そんな彼女の物言いにいちいち目くじらをたてたりすることはない。

彼と彼女はそういう関係だった。

元米軍特殊部隊の熟練兵相手にすら動じない彼女が清々しく感じる。元米陸軍特殊部隊出身者など、畏怖の対象であり、彼女のようにそんな彼に対して物怖じしない彼女は貴重な存在だった。

「あんたがばんくらだったら、雇うなんてお断りよ」

火の鳥の追従者は同様に強くなくてはならない。

そうしなければ、火の鳥の炎にあてられて自ら滅ぶばかりだ。
貪欲な炎は全てを燃やし尽くした後に、追従者すら蹂躪する。
強くなければ、火の鳥と共にあって生き残ることなどできはしない。

乾いた土色の町。

混乱の行く先に、ソマリアの人間たちはなにを見つめているのだろう。

白人の、派手な二人組はそうしてモガディシユの町中を駆け抜けた。

東アフリカの小さな国。

「あんたはその容姿で口が良ければ美少女だろうに……」

ため息のようなジョスリンの言葉にアリッサは低く笑った。

不穏な笑みがこれほど似合う女と言うのも実際珍しい。

「見た目が麗しいとか、言葉遣いがきれいとか、そんなこと糞でも食らえよ」

戦場でそんなことは役に立たない。

意味がないと彼女は告げる。

「そりゃ、ごもつともだが。とりあえずあんたは女なんだろう？」

ジョスリンの言葉に少女は喉の奥で笑うと、彼に告げた。

「染色体がXXであるということが女であるということなら、そうなんでしょうね」

まるで他人事のようにつぶやいた彼女の言葉に対する違和感。

おそらく、彼女にとってまさしく他人事なのだ。

どうでもいいことでしかない。

人の命を奪うことにためらいを感じない。

殺人者として。

冷ややかに彼女が告げた。

「ジョス」

彼女が彼を呼んだ。

アリッサの声は、子供の声が本来そうであるように甲高く耳障り

な性質を持っていない。

どこか独特な抑揚とイントネーション。

「なんだ？」

バイクの爆音に負けないように声を張り上げたジヨスリンに、アリッサは問いかけた。

「あんたは人を殺すときにためらったりするの？」

それはどんな意図で尋ねられたものだったのだろうか。

彼女は顎をあげて彼の頭を見つめている。

視線を感じた。

「……どういう？」

短く問い返せば、彼女はわずかな時間、考え込んだようだった。

「人を殺すことが、そんなに悪いことなのかしら」

疑問系ではなく、彼女が言った。

「アリッサ」

男は腰に回された彼女の手に自分の手を一瞬だけ重ねる。

皮の手袋をはめたその感触に、アリッサが驚いたようだった。

「さわらないで」

自分の都合のいいときだけ、自分から接触してくるくせにひどい言われようだ。

「俺は、あんたが殺せと命令すれば誰だって殺す」

彼女の命令があれば、それこそ大統領だって、どこかの国の王族だろうと殺してみせる。

魂の底から隷属したから。

彼女に従う。

「どうだか。他人なんてあてにならないわ」

切り捨てるように言った彼女に、男は低く笑った。

「まあ、あんたにはどうでもいいことだな」

可憐な殺人鬼。

アリッサが信じていようといまいと、彼は彼女に隷属すると決めたのだから。

不意になにかが空気を切る音が響いた。

戦場に慣れ親しんだ二人はその音に顔を上げる。

同時にジョスリンはバイクを停止させ、アリッサはバイクを跳ねる勢いで降りると、次の瞬間には戦闘態勢に入っている。

そうしてジョスリンは改めて周囲を見渡した。

置かれた現状を確認する。

人の気配のない通りだ。

路地裏ではない。

不穏な気配に慣れたモガディシウの住人たちはおそらく銃器を持った武装集団に自宅に引っ込んだのだろう。

窓は固く閉じられ施錠されている。

息を潜めるように、物音はなにもしない。

ジョスリンのブーツの足音だけが甲高く空気を震わせた。

「おいおい……」

遠巻きに彼らを取り囲むのは黒人の男たちだ。

「対戦車ミサイルかよ……」

黒人の男が肩にロケットランチャーを構えている。

「街中でなんてもん構えてんだか」

あきれたようなアリッサの声に、ジョスリンは現実に戻された。

「どこのだと思っ？」

「あれじゃないか？ 赤い国」

「でしようね」

すでに世界には存在しない国を思い浮かべて、彼女と彼は首をすくめた。

「いやねえ、なくなったのにすっかり死の商人気取っててさ」

「気取ってるわけじゃないと思うが……」

首の後ろを手で撫でたアリッサは、やれやれとため息をつきながら片足を軽くひいた。

体勢の崩壊した国家の武器が闇市を介して市場に流れることはよ

くあることだ。

軍服や、武器などもそのたぐいである。

「なんでこう、あっちの国って赤が好きなのかしら」

そんなんだから「アカ」って呼ばれるのよ。

などと嫌み混じりにつぶやく彼女に、男は銃を抜くこともしないまま事の成り行きを見守っている。

ロケットランチャーなどに生身で対抗したところで自分が死ぬだけだ。

とりあえず、余裕綽々で立っている「格上の人間」に、任せるべきだと彼は判断した。

「あんたは何色が好きなんだ？」

「べつつに、好きな色なんてないわ」

馬鹿馬鹿しい。

彼女はひとりごちて舌打ちした。

彼女は両手を広げて差し伸べる。

一度、またいた彼女の睫毛がゆっくりと上がる。

水色の瞳が、土色の街で男たちをとらえた。

「正体不明の相手には近づかないほうがいいのよ」

わかるのは、彼女が白人の少女であり、彼女と共にいるのが元米陸軍特殊部隊の熟練兵であるというだけだ。

ソマリ語でつぶやいた彼女はにっこりと笑う。

花のような笑顔だ。

天に、地に、まるで祈りを捧げるように、彼女は笑う。

世界の全てに祈りを捧げる。

岩も、砂も、なにかもを燃やし尽くす彼女の炎。

ジョスリンは腰に手をあてたままで、アリッサの小さな背中を見つめている。なにも恐れない強さを感じさせる。

誰も、彼女を否定などできない。

「弾のないピンポイント爆撃はいやになるね」

ジョスリンは口の中でぼやいた。

しかも、正確だ。
なにをするのか。

それを知る者は、この場にはアリッサとジョスリンしかない。
ロケットランチャーを構えた男も、軽機関銃を構えた男たち、中
にはショットガンを構えた男もいる。

そして、彼らが注意を向けているのは主にジョスリンだ。
誰も、アリッサに注意を向けていない。

無知というものは恐ろしいものだ、と、ジョスリンは冷静に考えた。
もちろん、ジョスリンは戦闘態勢に入ってもいないからほとんど丸
腰同然だ。

天に向かって祈るように両手を開いた少女は、境界の壁画にある
聖人のようだ。

祈りを捧げるように彼女は天を仰いだ。

ソマリ語の叫びが聞こえた。

恐らく、「動くな」とでも言ったのだろう。しかし、アリッサは
動じない。

数秒後、ドンと地響きのような音が聞こえた。

青い炎が人間がいる場所だけを突き上げるように焼く。悲鳴すら
上がらない一瞬の出来事だ。

地面の下から火柱が上がったのか、上空から炎が降ってきたのか。
誰もわからない。

ジョスリンすらそれを見極めることができなかった。

静かな戦闘だ。

開かれた両腕はそしてそっと胸の前で指を組み合わせる。絵とし
て見るならば純真無垢な天使が祈りを捧げているかのようだ。

しかし、その本当の姿は全く異なる。

生きとし生けるものを焼き尽くす地獄の業火だ。

巨大な炎の鳥が咆哮した声を聞いたような気がした。

紅蓮の鳥が、青い空に舞った……。

「ジョス」

「オーケー」

アリッサに名前を呼ばれて、同時にジョスリンが地面を蹴った。ほとんど腰を抜かしたように燃え上がる青い炎を見つめている男との間合いを一瞬で詰める。

男の頭を大きな手で掴んだジョスリンは一気に、リーダー格らしい男を引き倒す。その手が握っているショットガンを蹴り飛ばして、体重を掛けて男を取り押さえた。

訓練を受けているといっても、その内容はジョスリンが米陸軍時代に受けたものと比べれば大したことはない。

「俺たちに何の用だ？」

英語で聞いてから、ジョスリンはしまったと肩をすくめた。

おそらく英語は通じないだろう。

「わたしが聞くわ」

胸の前で組んでいた指をほどいた少女は、ブーツの足音をたててジョスリンに取り押さえられた男を見つめた。

すでに手の届かない場所に蹴り飛ばされているショットガンにちらりと視線を放ってから、地面に顔を押しつけられた男の頭を軽く蹴飛ばした。

ソマリ語で問いかける。

しばらくやりとりしていたが、やがて、ジョスリンに向かってひらひらと手を振ると踵を返した。

「離してやりなさい、ジョス」

高飛車な命令口調。

それを、ジョスリンは嫌いではなかった。

「こいつ、どうする？」

「帰してやるのよ……」

少女は低く笑った。

アンモニア臭が漂った。

男が恐怖の余りに失禁したのだろう。

取り押さえていた手を離れたジョスリンは、尻餅をついたままで

後ずさる黒人男を眺める。

くるりと背中を向けた少女に、黒人男はヒィッと悲鳴を上げて逃げ出した。

ジョスリンもアリッサも追いかけない。

「ICUか？」

「そう、その過激派」

金色の巻き毛を肩から払った彼女は男が逃げ出した方向を見やっ
てから、つま先で土を蹴った。

「なに言っただ？」

「あんた、元グリーンベレーでしょ？ ソマリ語くらいわかんないの？」

「悪いな、俺はフランス語とスペイン語しかやってない」

「あつそ、ちょっとICUを焚きつけただけよ」

彼女は言つとバイクにまたがるジョスリンを見つめてから、彼が
伸ばした腕に体をゆだねた。

アリッサは火の鳥。

元グリーンベレーのジョスリンなどから見ればひどく体力は低い感が否めないが、彼女が万全の状態であれば戦局を容易にひっくり返す。

もちろん、体力が低いということもアリッサ自身は自覚しており、そのために自分でできることはできる限りコントロールした。

彼女は傭兵だ。

自分の体のメンテナンスは自分の仕事である。

裏社会には様々な職種の間が存在している。

自ら血で手を汚す者。

間接的に、社会から他者を抹殺する者。

そして情報を握る者。

彼らは自らの能力を捧げて犯罪社会に生き続ける。

どんな組織にも過激派と穏健派がいる。もちろん、どっちつかずの日和見主義者もいれば、大局に流される愚か者もいる。

「組織があれば派閥ができるけど、その派閥のために意志決定が遅れるなら、馬鹿らしいことね」

アリッサはかつてそう言って笑った。

ジョスリンは炎の追隨者であり、その炎に魅入られた人間。

たとえば、アリッサがジョスリンという特異な存在を平然と受け入れたように、ジョスリンもまた野生の動物の持つ本能から格上の人間である彼女を受け入れた。

そこに理屈など存在しない。

動物の本能の世界で、理由などいらない。

彼の魂は、小さな少女の姿をした怪物に飲み込まれた。

守られなければならないほど弱くはない。しかし、全てを圧倒するほど強くはない。ひどく中途半端な存在。

誰だって得意な分野があり、不得手な分野がある。それを差し引いても、彼女は肉体的な制約を受けすぎた。

しかし、それでも尚、彼女は激戦の最前線で戦うことを選ぶ。まるで、それが生きる道だと言つかのように。

「まるで動物の本能だな」

自分のことを棚に上げてつぶやいたジョスリンの、広い背中を見上げて彼女は小首を傾げた。

「どうかしたの？」

「なんでも」

可憐な少女は黄金の巻き毛を揺らす。

「俺は、あんたに従う」

犯罪者としての通り名をマジックボム。それを知らないわけではない。

それを知っていてジョスリンは彼女に従属した。

本来、狩りを行うオスが、メスに従属するということがどれほど異端なことであるのか。

「変な奴」

アリッサはそう言って笑った。

彼女は嘘をつかない。

彼女は偽らない。

「あんたほどじゃない」

言って彼は肩をすくめた。

「……なによ、それ。わたしが酔狂みたいじゃないのさ！」

「違うのかよ」

あきれたような彼の声に、少女は眉をひそめた。

「わたしは戦争狂でも、殺人狂でもないわ」

しかし、人を殺す必要性があるなら殺すだけだ。

「……」

真面目な声の彼女に男は軽く肩をすくめただけだった。どちらにしろ、襲撃をかけてきた男を逃がしたことにより、追跡はいっそう

厳しくなるだろう。

容易に想像のつく事態にジョスリンは内心でため息をついた。アリッサになにを言ったところで無駄なことはわかっている。

彼女は、これまでそうして生きてきた。

殺人狂でもない。

戦争狂でもない。

ただ、戦争屋を生業としているためにそのように受け取られることが多いだけのことだ。

もちろん、ジョスリンも戦争屋ではあるが、虐殺行為が好きで今の立場にいるわけではない。

ジョスリンが戦争屋であるのは、おそらくアリッサよりもずっと平凡な理由だ。

年若くして、アメリカ陸軍特殊部隊に在籍したことによる被害。

彼は、平和な世界では生きていけない。

ささくれた精神が軋んだ音をあげた。

平和な社会で生きていくことができる、元最前線の熟練兵など何人いるだろう。

ほとんどの人間が、人間として破綻し、そうして戦場に帰っていった。

彼もまたそんな人間のひとりだった。

ジョスリンが幸運だったのは早い段階で、彼を超越する異常な人格に出会ったことだ。

彼女の異常性は、ジョスリンのささくれた心を癒すには充分すぎた。

まるで彼女の精神は鏡のように、ジョスリンを映し出した。静かな湖面か、月のようだ。

凶暴な精神はしかし、時として何物よりも静謐に、全てを映し出す。

彼女がいたから、彼は正気でいられた。

その点について、ジョスリンはアリッサに感謝している。彼女が

いなければ、おそらく自分はただの戦闘マシンになっていただろう。そのことを、なんとはなしに察した。

しかし、おそらく同種の人間に近いジョスリンですら彼女の魂を救うことなどできない。

彼は彼女に救われたというのに、である。

誰もアリッサの魂を救うことはできない。

ジョスリンはそんなことを思いながら目を伏せた。

誰かが人を救うこと、など、もしくはひどい思い上がりなのではないのかと。

そんなことを思った。

愛しているとか、救いたいとか、そんなことを願い思うことなど、相手を馬鹿にしているのではないかと。

だから、元特殊部隊の男はなにも言わない。

彼女を救いたいなどとは言ったりはしない。

「アリサ」

そつと彼が少女の名前を呼びかける。

アリッサは答えない。なにか考え事でもしているのか、無言のままだ。

「どうせならさ」

不意に彼女がぼつりとつぶやいた。

「ん？」

バイクの爆音にかき消されそうな彼女の声を、男の鼓膜がひろう。「どうせなら、あいつら、全戦力で挑んできてくれれば、深追いしないですむから楽なんだけどね」

物騒なことをさらりと言つてのける彼女は、喉の奥で低く笑ったようだった。

彼女の考えていることなど、ジョスリンには理解できるものではない。

「自分の体力も考えてくれよ」

げんなりと相づちをつつた彼に、少女は声もなく笑ったようだった。

た。

自分の体力の限界など考えていない。

彼女はそういう人間だ。

バイクにまたがり、ジョスリンの腰に手を回したままで、少女は背後を振り返った。

先ほどの戦闘前に、ロケットランチャーを打ち込まれた歩道には穴があいているのが見えた。

滅茶苦茶なのはアリッサ自身もそうだが、銃火器を使用するわけではない彼女はパイロキネシスを繊細にコントロールすることによって、被害と騒ぎを小さくするように調整する。

「まあ、あいつらもそろそろ本気でくるとは思っけどね」

アリッサは静かにそう告げた。

「ロケットランチャーを出してきて本気じゃないって？」

「せいぜい小手調べかなんかよ。殺せれば問題が小さいうちに解決できるかなってレベルのやつね」

小さな少女の姿の彼女はどこまでも冷静だ。

「……たぶんだが、一応本気で殺しにきてたとは思っぞ？」

「あら、そうなの？ 気がつかなかったわ」

もしも、襲撃した側に聞いている人間がいたならば、あまりの彼女の物言いに怒り狂うだろう。

襲撃者の本気を「気がつかなかった」の一言で片づけたアリッサはそうしてから、男のたくましい腰に回した腕に力を入れ直した。

細い、子供のままの腕。

その腕に視線を投げかけて、ジョスリンは目元をゆるめた。

こんな彼女を知るのは自分だけだ。

アリッサの戦友であるという自負。

不穏な気配がまとわりつくのを彼らは感じている。野生の本能がそれらをとらえた。

ソマリアに入ってから以来、突き刺さるような眼差しは、今は違和感となって彼らにひしひしと押し寄せる。

黒人の国に、白人が訪れたのだ。

目立って当たり前である。

しかも、一目でわかるほど、少なくともジョスリンは相応の訓練を受けた人間で、そうしてその傍らにいる少女もまた、どこか異様な雰囲気を持ち合わせている。

なにかが異なる、と感じてなにがどう異なるのかはわからなくとも、「異質なもの」と感じれば、排除しようとするのはごく自然な行為だ。

異質なものを感じ取るのは一種の防衛本能と言ってもいいだろう。危険と隣り合わせの場所では、それを感じ取れなければ舞っているのは身の破滅だ。

「……矢でも、鉄砲でも持つてくればいいのよ」

彼の背中に顔を押しつけたままで少女は独白した。

そしてその独白は、風に乗って消えていった。

ソマリアに入ってから、彼らは何度となく小競り合いに巻き込まれた。

さすがに、町中でロケットランチャーがでてきたことには、さすがのジョスリンも驚いたが、アリッサは特に驚いた様子もなかった。おそらく、アリッサはジョスリンが思う異常に危ない駆け引きをしてきたのだろう。

そんなことを彼は思った。

あれは、悪魔だ……。

男の声が響いた。

静かだが、恐怖に満ちた声だ。

「……わたしが死んだ後に、別の魔女が世界に名を馳せる。その魔女は、世界を崩壊に導くが、正しい軌道に戻す者。かの魔女に従え。かの魔女をたたえよ」

ひっそりと老婆の声があたりの静けさを打ち破ったような気がした。

しかし、聞こえたわけではない。

気がしたただけだ。

かつて、アフリカ大陸最強の魔女と呼ばれた女は、今はこの世にいない。

だから、彼女の声が聞こえるわけがないのだ。

男は震えながら窓の外を見た。

青い空が広がっている……。

イヤな音が響いた。
空気を切り裂く音だ。

数秒の時間をおいて、ドンと鈍い音が上がり、地面から衝撃が襲う。

疑うまでもない。

迫撃砲だ。

金色の巻き毛の少女はがりがりと頭をかきむしってうんざりとため息をついた。

「あー、もう……」

眉をよせたアリッサはちらと眼差しを音がした方向に向けてから、口元を手でおおった。

土煙が舞い上がる。

「銃器に頼るしかない低脳って、大概こうよね」

「まあ、普通の対応だとは思うが……」

ロケットランチャーにも軽機関銃にも怯まない相手では、迫撃砲も似たようなものだと思うが、とジョスリンは思う。

彼女にとって手持ちの武器などどれも似たようなものなのかもしれない。

「化け物だとも思われてるんじゃないのか？」

投げやりなジョスリンの声に、アリッサは目線だけで彼を流し見た。

「今に始まったことじゃないわ」

アリッサは戦場では常に怪物のように扱われてきた。そんなことに対して、今更のように感慨を抱くほどやわではない。

冷やかな彼女の言葉に、ジョスリンは低く笑う。

彼女の考えていることは、彼にはわからない。

そして彼の考えていることを、彼女は理解していようとはしてい

ない。

二人はそういう関係だ。

そしてアリッサもジョスリンもその関係に疑いを抱いてはいない。彼らは互いを信用している。

それだけのことだ。

信頼がなければ戦場で互いの背中を、互いに任せることなどできはしない。

「それにさ、化け物扱いはあるとも一緒でしょ」

ざつくりと言い放つ彼女に、男は肩から力を抜いた。

「アリッサほどじゃない」

自分はただの人間で、ただの元グリーンベレーというだけの立場。出自すら不明な彼女とは根本的に異なる。

凡庸とは言い難いが平凡。

「さて、どうするね。火の鳥」

ジョスリンの言葉に、アリッサは右腕を高く天にあげる。

「あんたが望んだんだぜ？ どうせなら全戦力で向かってくればいってな」

「全戦力なんかじゃないわよ」

即答した彼女は、耳に発砲音を聞いた。

ジョスリンは同時にアリッサの体を抱き込んで横に飛ぶ。

「なに……」

「あんだだって、不死身じゃないだろうが」

抗議しようとするアリッサに告げた彼に、少女は唇をへの字に曲げた。

確かに自分はどれほど「凡庸な人間」という枠からはずれた存在であったとしても「生身の生き物」であるという事実には変わりがない。

それを「たかが元グリーンベレー」の男に突きつけられたことが不愉快でアリッサは黙り込んだ。

戦場に存在する「名誉」とは確実に生き残ることだ。

それが戦士たちの名誉も、名声も決する。

自分の生死に無関心な人間など、戦士にはなれない。

そういった意味では、ジョスリンだけではなく、アリッサも紛れもない戦士だったが、彼女は自分のことを戦士だとは思ったことがなかった。

誰も彼女を超越することなどではしない。

世界には、そんな「人間」も存在するのだ。

背中に吊したナイフを抜いたアリッサと、時を同じくして銃をホルスターから抜いたジョスリンは路地に駐車された乗用車のかげに身を潜めた。

確かに、アリッサは生身で、怪我也すれば血も流す。

「大丈夫か？」

気遣うように問われて彼女は不機嫌に目を上げた。

「問題ないわ」

アフガニスタンなどの激戦の内戦地帯をくぐり抜けてきた女だ。体が小さいということは、時に不利益も多く生み出したが、そればかりではない。

大柄ではないということは多くの利益ももたらすのだ。

「過激な連中は大っ嫌いよ」

無然とした彼女は道路に転がる土くれをつかんだ。

事態を大きくせずに収拾するすべも彼女は身につけている。戦場ではそういった状況判断も生死を決するのだ。

焦土にすればいいというものではない。

時には、被害を最小限に押さえるという選択も必要なのである。

「それ、ものすごく説得力がないと思うぞ」

あきれたようなジョスリンを軽くにらみつけた小さな少女は手にした土の塊を前方に向けて放り投げた。

遅れて響くのは砲撃の音だ。

「さて、案内してもらいましょうか」

低く彼女が告げた。

「あいつら、なんだ？」

間の抜けたジョスリンの声にアリッサは、目線だけを彼の顔に向けた。

身長差がありすぎて、目を動かしたただけで彼を見上げることなどできないだろうに、と彼はなぜかひどく冷静に思った。

「見ればわかるでしょ、軍隊よ」

「まあ、それは一目瞭然だが」

アリッサの冷静な声に相づちを打った大男は、重い装備を背負ったままで小首を傾げた。

「荷物が重いからいやだとか、くだらないこと言い出したら殺すわよ」

相変わらず彼女の物言いは物騒だ。

しかし、ジョスリンは動じない。

「こんなもん重いうちに入らんさ」

陸軍の特殊部隊として彼は長い訓練を積んだのだ。

それに比べれば、今、現在の状況など危機的な状況にも入らない。少し危険なだけだ。

ジョスリンの言葉に、ナイフを片手にしただけで車の陰から飛び出したアリッサは軽快に走る。

その体を銃弾や砲弾が貫くことはない。

モガディシユの郊外。

貧しい庶民たちの家が建ち並ぶスラムに近い。

そんな場所とはいえ、一応、町中だ。そんなところで迫撃砲などを持ち出す人間の気が知れない、とジョスリンは思った。

ジョスリンのような軍人たちですら、一般庶民を殺すことに対しては抵抗を感じるのだ。

それを、目の前の人間たちは容赦なく選択する。

そのことについて、ジョスリンは嫌悪感を感じる。

「ベトナムだと思いなさい」

静かにアリッサの声が響いた。

「無理無理」

冗談めかしたジョスリンに、アリッサが肩をすくめる。

「じゃ、あきらめなさい」

全てを見透かしたようなアリッサの言葉に、今度はジョスリンがかすかに眼差しを揺らした。

そもそも、淡々と話をしているような状況でもないのだが、アリッサは冷静な言葉をつづる。

銃弾が嵐のようにたたきつけられる中を、アリッサは平然と走りすぎて、大きく全身を使って手にしたナイフを振りあげる。

地面を蹴りつけて跳び上がるその高さは驚くほどだ。

小さな子供をとらえようとした腕を、蹴り飛ばして肩から上に重心を移した彼女は、一息にナイフを突き出した。

アリッサの驚異的なバランス感覚が可能にする、戦闘技術だ。体が小さいことを逆手に取る。

軽い重量の彼女の攻撃は素早く、的確で緩められることはない。アリッサが跳ぶように舞うのをジョスリンは視界の隅で見やった。

彼女は強い。

「アリサ……！」

「うるさい」

勝手なものである。

もつとも、それについても今に始まったことではない。

彼女は勝手だ。

やれやれと肩から力を抜きながら、ジョスリンは彼女にショットガンを向ける男を撃ち抜いた。

大の男でもショットガンで撃たれば命の保証などない。小柄なアリッサならばなおさらのことだ。

「全く……」

彼女の戦い方はまるで一匹狼だ。

誰かと組むとか、そういったことは考えていない。軍人として戦ってきたジョスリンにとっては、それが大変やりづらいのだが、雇

い主とあらば我慢するしかない。

一匹狼だからこそ強く、そして軍人たちの予測を容易に越えていく。

アリッサは一人で戦おうと思えば戦える人間なのだ。

だが、熾烈な戦場で、アリッサはそれをあえて選択しない。彼女は男の首にナイフを突き刺して、そのまま引き抜くと、勢いを殺すこともなく男の背中を足で思い切り踏み込むと、ひらりとワンピースをたなびかせてブーツで着地するとたじろいだように銃を構えたまま固まった男をまっすぐ見つめると、軽く腰を落とした。

正体不明の強さを持つ少女。

彼女の一挙一動に、兵士らしい男は警戒するように体をこわばらせた。

そうだ。

怖いのだ……。

彼女が、恐ろしかった。

「……くそっ！」

吐き捨てた男に、彼女はかすかに眉をひそめる。

どうして恐ろしいのかすらわからない。

「レディ相手に、汚い言葉は使うものじゃないわよ」

その口で言うか、と、おそらくその場にいる誰もが思っただろう。

彼女を恐れて、少しずつ撤退していく。

そしてアリッサはそれを追う。

相手の本拠地をつかみたいならば、逃げるのを追えばいいのだ。

しかし、そんなことを一人でやろうとする人間などそうそういない。

言うのは簡単だが、実際やろうとするには困難がつきまとう。

それこそ、軍隊のような集団には向いていない。

軍隊がだめだというわけではない。

「アリッサ、大丈夫か」

「誰に聞いているのよ」

一人ずつ殺していく。

まるで、童話のように、足跡でもつけるように。

ジョスリンはなぜか「ヘンゼルとグレーテル」を思い出した。

彼女がやっているのは、足跡をつけているわけではなく、彼らの足跡を追っているのだが。

大したものだと、彼は思った。

「アリサに聞いてんだよ」

「もう、なんだっていいわよ」

ナイフと、パイロキネシスでひとりずつ殺害する。

その邪魔を、ジョスリンはしない。

ジョスリンの仕事はアリッサの邪魔をすることではない。

不意に後方に待機していたらしいジープが、エンジンをかけて逃げるように走り去る。

それを見て、アリッサが叫んだ。

「ジョス！」

その声を聞いて、ジョスリンは体を翻した。

路地に無造作に停車したバイクにまたがると、エンジンを噴かす。バイクを走らせたジョスリンは、片腕を伸ばしてアリッサを抱き上げた。男のたくましい胸に抱きついて、彼女は前方に視線を向ける。

「あいつらを追って」

「承知した」

彼女に言われるままにジープを追うジョスリンは、赤茶けた町にそつと眉をひそめた。

アリッサは男の背中にしがみつく。

ともすれば吹き飛ばされそうになる小さな体。

「……アリサ、大丈夫か？」

男の声に、アリッサは彼の腰の肉をおもいきりつまむ。

そんな彼女の指の力は大したものではなくて、ジョスリンはそれくすぐったさにくすりと鼻を鳴らすようにして笑う。

「くすぐったいからやめてくれ」

背中を感じるのは固い銃の感触と、少女の柔らかな肢体。

黄金の巻き毛の少女。

どこからどう見てもかわいらしい、と思えるような。

そんな存在だ。

しかし、彼女の正体は異質で、誰にも理解などできない。いつからか、自分は彼女のツインソウルだと自覚するようになってからも、彼女の正体不明さは理解などできはしない。

もっとも、それで良いと自ら選択したのだから、それについて彼は自分の意見を曲げるつもりなどない。

彼女のツインソウルとして、天上から選ばれた。

アブドゥール・アダン。

ソマリア再解放連盟の穏健派、その指導者のひとりにあたる男は、今、イスラム連邦会議の過激派に命を狙われている。

「つまるところ、ICUの過激派共を一掃すればとりあえずはアブドゥール・アダンの安全は確保されるというわけか？」

そして、彼らは暫定政権にとってソマリアに対するアクセスの足がかりになる。

それ故に、アメリカを含む暫定政権はアブドゥール・アダンに固執するのだ。

簡単な構図にジョスリンは自分の前に広がる空を見上げた。

夕方のオレンジの光の中に、ジープが走り抜ける。

その後を、ジョスリンのバイクが追った。

暑いソマリアの日差しの厳しさに、ジョスリンは目を細めた。

そんな暑さにはかつての内戦地帯で慣れていたはずだ。戦場で暑いとか、寒いとか、そんなことを考えた事などない。考える必要などない。

戦場で大切なことはたったひとつ。

戦場でどうやって生き残るか、ということだけだ。

彼の腰に回された腕が力を入れ直す。革の手袋をした男の手が軽く少女の手に触れた。

アリッサは確かに強い。

しかし、その強さにはどこか危うげなものをかんじてならないのはなぜなのだろう。

「なにか余分なことでも考えているんでしょ」

バイクのエンジンの音に紛れる少女の声に我に返った。

「……悪い」

低く響く声で謝罪した彼に、少女は背中に頬をおしあてたまま無言を返した。バイクの爆音にわざわざ対抗しようとはしないところが彼女らしい。

彼女の言いたいことなどわかっている。

戦場で、余分なことを考えていれば、待っているのは自分の死だけだと彼女はおそらくそう言いたいのだ。

どこか刹那的な彼女の進む先になにかがあるのか。

そんなデッドヒートは数時間続いた。

追跡者をまこうとしてあちこちの角をジープは曲がるが、そんなことで追跡に慣れているジョスリンは相手を見失ったりすることはない。

やがてたどり着いたのは大きな邸宅だった。

男は重いエンジンの音をたててバイクを止めた。

そのバイクはソマリアでの足として購入したものだ。もっとも代金を払ったのはジョスリンではなくアリッサだ。

今回の任務でジョスリンは一銭も払う必要はないのだ。

アリッサ・ノースウッド。

火の鳥の雇い主はアメリカ合衆国であるが、ジョスリンの雇い主はあくまでアリッサだ。

彼女は彼を信頼している。

「やつこさんたちやきがまわったかね」

ジョスリンの言葉にアリッサは背中であ手を組んだまま門扉越しに屋敷の中を覗き込んだ。

その程度で内側が見れるわけもない。

「チビには見えないと思うが……」

「うるさいな、あんたなら見えるとしても言いたいわけ？」

かみつくような彼女の言葉は打てば鳴る鐘のようで心地が良かった。険しい眼差しの彼女は苛立つように親指の爪をかんだ。

派手にやろうと思えばいくらでもできるのだ。しかし、今のアリッサに要求されているのは単純に派手に殲滅すればいいというわけではない。

ジョスリンの身長などよりもずっと高い扉は、いかに彼であつても内部を覗けるわけでもなかった。わかって言っているのだからタチが悪いと、ジョスリンは思った。

「いや、見えるわけがないだろう？」

ジョスリンが警戒するように門扉に近寄っていくと、少女は背筋を正して迷彩柄のワンピースをたなびかせると細い手を門扉に伸ばす。

その扉に電流が流れているとか、触れることで警報装置が作動するだろうとか、そう言った躊躇が全く見られない仕草だった。

相変わらずのことだがアリッサは通常の傭兵たちとは全く違う思考の持ち主だ。

あっさりと触れる。

彼女の手が門扉を開いた瞬間、かすかな音をたてて警報装置が作動した。

作動したと思った。

そのとき、火花が散って警報装置が一瞬で燃え上がる。

こういうときアリッサは相手に容赦などしない。

誰よりも残酷で冷徹な傭兵、火の鳥。

「行くわよ」

圧倒的な上位者として、ジョスリンの前に彼女は立つ。

彼女はジョスリンの前にいる。

それこそ、彼が憧憬を抱いた傭兵「火の鳥」であるということ。そんな背中を見つめて、ジョスリンは口元でほえんだ。

かつて、彼の心を灼き尽くした炎の使い手。

高い塀の内側に躊躇せずに入っていく彼女に、サブマシンガンとショットガンを手にしたままで追いかけるように歩きだした。

ソマリ語の叫び声にアリッサは冷たい瞳を向ける。

自分の胸の高さに右手を挙げた彼女は指先を閃かせた。おそらく、その仕草は意識を向け、指先を向けることによってパイロキネシスの方向性を決めているのだろう。

だから彼女は自分の能力を扱う時に手を伸ばすのだ。

「人間を焼くときって、ものすごく臭いのよ。知っている？」

誰に言ったのか。

彼女は英語で告げる。

その視線の先にはソマリア人のイスラム法廷会議の兵士がいた。

「……」

ジョスリンは片目を細めた。

人間を焼くときの臭いを、忘れたことなどない。

「知らないはずがないだろう」

彼の言葉に、アリッサは声を上げて笑った。

からからと笑う。

「でも、人間って、本当に良い松明よ……！」

低く、地鳴りのような音が空間を引き裂いた。

ゆつくりと歩いて行く黄金の巻き毛の少女。銃口を向けて硬直しているソマリア人に少女はほぼ丸腰に近い姿でにじり寄る。

紫とも、緑とも言えない炎が男たちを包み込んだ。

迎え撃とうとする兵隊を次々と殺していく彼女はジョスリンを振り返ったアリッサは不敵にほえむ。

「……まだ大丈夫か？」

ジョスリンに問われて彼女は無言で頷いた。

そうして彼らの目の前に白い屋敷が現れた。

「どうする……？」

白い屋敷。

それは、いかにも暮らしぶりに余裕のある人間の屋敷だと思わせた。

国のほとんどの人間が貧しい暮らしをしているというのに、こうして裏側により近い人間たちは豊かな暮らしを謳歌しているのだ。

それを、アリッサは間違っているとは思わない。

ジョスリンも同じだ。

人間が欲望のままに生きると言うことは決して間違ったことではない。

誰でも、それなりに欲というのは持っている。

それはアリッサと、ジョスリンでは全く違う形をしているものだったが、欲があるからこそ人間は生きるのだ。

なにかを欲するために生きている。

「でも、残念ね」

アリッサはその二階建ての屋敷を見つめたままでそう言った。くすくすと笑う。

「わたしと、ジョスト、あいつらのほしいものは、同じじゃない」だから理解などできない。

アリッサはそう言う。

まるで、神に祈りを捧げる天使のように、少女は両手を胸の前で

大きく開く。

なにかを受け入れるように。
なにかを受け止めるように。

彼女は、断罪を下す者。

基地を丸ごと吹き飛ばすことを容易にやってのける彼女だ。個人の屋敷を炎で包むことなどたやすい。

高熱の炎を操る彼女は天を仰いで、星を認めるとにこりと笑った。そうして、屋敷ごと武器も兵士も、そして首謀者すらも炎で灼き尽くした彼女の任務は終わった。

*

翌朝、モガディシユのホテルで目を覚ましたアリッサはソファに腰掛けたままで眠っている男の存在に気がついた。

金色の髪の色男。

傭兵などしていなければそれなりに女から引く手あまただろう。

ぼんやりと視線を向けていた彼女は裸足のままで床に足をおろした。

ぺたぺたと音をたてて眠る彼に近づいた。

男の眠る顔を無言で覗き込む。

こんなときの彼女の気配は本当に無邪気としか言えないもので、ささくれた男たちはアリッサの気配を気づくことができない。

たとえば、眠っている時に小鳥の気配に誰が意識を傾けるだろう。そんな気配とも言えいいのか。

「ジョス……」

少女が呼びかける。

薄く目を開いた彼はふと腕を伸ばすと少女の体を抱き込んだ。驚いたアリッサが抵抗するが、男はそうしてそのまま眠りに戻る。

「わたしは抱き枕じゃないって言うのに……」

ぼやいた彼女は抱きしめる男の腕をほどくことができずに、あき

らめて瞼を閉じた。

どちらにしたところで、アブドゥール・アダンの命を狙っていた過激派の殲滅は終わったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4495r/>

名誉の在処

2011年7月30日03時25分発行